
魔女たちの楽園

大神 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女たちの楽園

【Nコード】

N0573Q

【作者名】

大神 翔

【あらすじ】

現代より少し未来の日本。

魔法が発見されて、人々の間にもそれが浸透してきた時代。

そしてなぜか魔法は女性のほうがうまく使うことができ、

必然的に女尊男卑になってしまった時代。

そんな時代の魔法専門の名門校に入学した女性が苦手な少年は

その学生の約九割が女子だと知り、絶望する。

……これからどうなるんだ？

男のプライドも何も無い時代に、過酷な学園生活が始まった。

入学 スタート

まさしく四面楚歌だ。

俺の高校生活、最初の感想はそれだった。

たかきまほうがくいん
高城魔法学院。

全日制の私立高校であり、日本の魔法専門高校の中でも五本の指に入ると言われている、

まあ、いわゆる名門校だ。

奇跡的にもそこに入学できたときには喜びのあまり、実の妹に抱きついてしまい、

そのあと魔法でボコボコにされたくらいだ。いまだに頬が痛むのは気のせいだと思いたい。

だから、入学者の約九割が女子だと親父から教えられたときのシヨツクは相当だった。

いくらなんでも九割って。

だがそれを知ってもどうすることも出来ない無力な俺は現在、自分の所属する高城魔法学院普通科1年D組の教室にいるわけだが、周りを見渡すまでもなく分かる。

今、俺は人生最大の危機に瀕している。

女子九割という情報に間違いはなかったらしく、

このクラスも大半が女子だ。地獄とはこういう場のことを言っただけはなかるうか。

不幸中の幸い、席が窓際の後ろから二番目なので女子に四方八方を包囲されるという状況は回避したものの、これからどうなっていくんだらう。

「ねえねえ、ちょっとちょっと」

突然背中をつつかれたので俺は反射的に背筋を伸ばしてしまった。そのまま硬直する。女子に話しかけられてしまった。これは非常にまずい。しかし無視などしたら間違いない、3年間いじめられる。

下を向いたまま振り返る。

「な、……なんででしょうか？」

自分でも驚くほど小声になってしまった。しかもなぜか敬語に。

「……これも防衛本能といえるのだろうか。」

「うわうわ、なんで敬語なの！？ 同い年なんだしタメ口でいいよ。そんなことより男の子だね。すごいすごい！！」

うれしそうな声で言ったので

「なにが？」と聞き返しそうになって慌てて口をつぐむ。

第一印象はできるだけ良いほうがいい。

「はあ、ど、どつとも。」

「君、名前なんていうの？ あ、ちなみにちなみにわたしは若月沙耶わかづき さやね。」

ハイテンションのまま自己紹介してきた若月さん。
いや、彼女からするとこれが普通なのかもしれない。だとすると、
想像以上の強敵だ。

「……柳葉丈二やなぎはなぢゆうじで……だ。」

またもや敬語になりそうなのを急いで訂正する。

「柳葉ジョージ、つてもしかしてハーフなの？」

「いや、頑丈とかの丈と、数字の二で、丈二。」

「へえ、なんかなんかかっこいいね。それじゃそれじゃこれからよろしくね、ジョージ君。」

さっきから思っていたが、どうやら彼女は接続詞を二回連呼するのが口癖のようだ。

それに会ってわずかに数回しか話してないのに下の名前で呼び始める。

「……やっぱり、女は苦手だ。」

「はあ、よろ……」

「はい、じゃあホームルーム始めますよー」

俺のしどろもどろの挨拶を遮ったのは教室中に響く女性の声だった。前を向きなおすと教卓の後ろに誰か立っている。このクラスの担任のようだ。

髪を後ろで二つに結んで、眼鏡をかけている小柄の女性。

「全員いるみたいね。じゃあさっそく自己紹介から始めましょうか。」

・・・そういえば下ばかり見て顔ちゃんと見てなかったな。

後ろの席の女の子の顔すら、ろくに見ることができない自分を少し情けなく思いつつ、窓から差し込む光をやけにまぶしく感じていた。

自己紹介 ゲート

「私が、今日からここ、1年D組の担任になった篠原真夜しのはらまやです。

これからよろしくね。皆さんはこの高城魔法学院の厳しい入学試験に合格した、一般人よりも

遥かに優秀な人材です。そこは自信を持って構いません。

しかしこれからの世界は、あなたたちの知っているような甘いものではありません。

そのことを胸に刻みつけておきなさい。」

けっこうサバサバした性格のようで次から次へ言葉を並べていく篠原先生。

ちよつと苦手なタイプだ。

……まあ、この世で俺の得意な女性は皆無だろうけど。

「それでは自己紹介……は、必要ないわね。」

きたー！ー！ー！！

俺の最も恐れていたイベント、自己紹介。

ずっと悩んでいて昨夜は一睡もできなかったが、これで一安心……

「あ、男子はしてくださいね。」

なんでっ!?!?

「女子はお互い話しやすいでしょうが、やはり男子にとっては難渋と思います。」

そこで男子の四人には女子と普通にコミュニケーションを図るこ

との糸口として

自己紹介をしてもらいます。」

余計なお世話です。

「それでは、犬丸君からお願いします。」

「はい!!」

俺の席から対角線上で男子生徒が立ち上がる。

しかしまずいことになった。昨日考えてきた挨拶もあるにはあるが、正直まともに言える自信は、ない。

いつそ「柳葉丈二です。よろしく。」のみで済ませてしまおうか。

いや、ここでそんなぶっきらぼうではクラスの女子から

「何、あいつー？しばこっか。」や「くーい。」

「私が、今日からここ、1年D組の担任になった篠原真夜せのはらまことです。

これからよろしくね。皆さんはこの高城魔法学院の厳しい入学試験に合格した、一般人よりも

遥かに優秀な人材です。そこは自信を持って構いません。

しかしこれからの世界は、あなたたちの知っているような甘いものではありません。

そのことを胸に刻みつけておきなさい。」

けっこうサバサバした性格のようで次から次へ言葉を並べていく篠原先生。

ちよっと苦手なタイプだ。

……まあ、この世で俺の得意な女性は皆無だろうけど。

「それでは自己紹介・・・は、必要ないわね。」

きたー！ー！！

俺の最も恐れていたイベント、自己紹介。

ずっと悩んでいて昨夜は一睡もできなかったが、これで一安心・・・

「あ、男子はしてくださいね。」

なんでっ！？

「女子はお互い話しやすいでしょうが、やはり男子にとっては難渋と思います。」

そこで男子の四人には女子と普通にコミュニケーションを図る」との糸口として

自己紹介してもらいます。」

余計なお世話です。

「それでは、犬丸君からお願いします。」

「はい！！」

俺の席から対角線上で男子生徒が立ち上がる。

しかしまずいことになった。昨日考えてきた挨拶もあるにはあるが、正直まともに言える自信は、ない。

いっそ「柳葉丈二です。よろしく。」のみで済ませてしまおうか。

いや、ここでそんなぶっきらぼうではクラスの女子から

「何、あいつー？しばこっか。」や「暗っ！きもっ！」などといった印象を与えてしまう。

そうやって知恵をしぼっている

「はい、じゃあ次は・・・柳葉君。」

見るといつの間にか俺の前の三人は終わってしまったようだった。まだ俺の頭の中は白紙状態なのだが。

「えっと、柳葉君？」

「あ、は・・・はい？」

「自己紹介、君の番なんだけど・・・」

「・・・はい。」

重い腰を上げて椅子から立つ。女子からの視線をヒシヒシと感じる。だがこれを成功させなければ、俺に明るい未来はない。

「や、柳葉丈二です。」

何も考えずに、ただ口を動かし言葉を紡ぐ。

「魔法はまだまだ未熟者ですがこれから皆さんと一緒に楽しく学んでいけたら

いいな、と考えています。」

お、意外といけそうだぞ。

最後までビシッと決めて、座ろう。

「これから三年間、よろしくお願いしましゅっ！…！」

最悪の自己紹介になりました。

妹 ボス

自己紹介がクラス全員の嘲笑を盛大に受けてしまったあと、顔や体中が一気に
火照ってしまいそのままホームルームが終わるまでずっと机に突っ伏していた。

ホームルームが終わると俺は逃げるようにして教室から出た。

そのとき後ろから声をかけられたような気がしたが、これ以上あの空間にいることはできなかった。

……終わったな。俺の学園生活。

そんなやりきれない気持ちをひきずりながら帰路に着いた。

「なあ、どうだったー？生まれてはじめてのハーレムは？」

家に帰った俺を迎えてくれたのは、なぜか無性にうれしそうな妹。
やなぎはるか
柳葉三佳。13歳のわりに身長が高く、いつも腕に銀のブレスレットをつけている。

色白の肌にすらっとした体型で、兄の目から見ても美人の部類に入るだろう。

……もし性格がもっとまともならば、だが。

「ハーレムなんて、もう死語だろ。大体俺が女の子苦手って知ってるだろうが。」

「あー、ごめんごめん。すっかり忘れてたー。でもあんた、今日女の子と話したでしょー。」

「なっ……!!」

妹からの指摘に「なぜそれを?」と言いそうになったがすぐに原因に気づいた。

「お前、俺の記憶のぞいたな?」

「うん!」

悪びれもせずに言っただけの三佳。

こいつは魔法においては優等生で、今では俺は足元にも及ばない。

「……っ!ふざけんな!それは前にもうしないうって約束したろ!」

「知りませーん。うちの記憶は一週間に一回リセットされちゃうんでー」

三佳は明らかに俺を馬鹿にした顔をこちらに向ける。

「……こいつっ!!」

一瞬こぶしを強くにぎりしめたが、すぐにそれを解く。理由は簡単、俺は喧嘩でこいつに勝ったためしがない。感情に流されてはだめだと自分に言い聞かせる。

そのまま無視して自分の部屋に向かうとする。

「あれー、かかってこないの?つまんないの。」

「あ、そっだ兄貴!」

「・・・なんだよ？」

腕を引つ張られ、しぶしぶ三佳を見る。
するとまぶしいくらいの笑顔で、

「こんな妹ですが、これからも・・・」

よろしくお願いしましゅっ！..！」

俺は自分が女の子が苦手なのは家族が一番の原因だということ
改めて実感した。

友達 ボーイ

翌朝、重い足を引きずるようにして学校へと向かう。

だんだんと学校に近づいてくると、空を飛んでいたり、屋根の上を走っている生徒を

見かけるようになった。

……登校するだけで魔法なんて、疲れるだろ。

あまり人に会いたくなかったので余裕を持って家を出たつもりが、

結局ピークのときに

学校に到着してしまった。

人は気が乗っていないと、自然とゆっくり歩いてしまうものだ。俺は身をもって知った。

1年D組の教室の前に来て、一度深呼吸をして扉を開けた。

クラスの視線を一手に集めてしまった、ような気がした。

すぐにうつむいて自分の席のある窓際の後ろのほうに足を向ける。

「ようやく来たな。ほんま待ちわびとったわ。」

いきなり目の前に一人の男子生徒が躍り出た。

「誰だ、お前？」

親しげに話しかけてくるところを見ると初対面ということはないだろうが、

俺にはまったく見覚えがない。

細い体躯に、同じように細い眼。その容貌からは狐を思い出される。

「ええっ！ほんまにっ！あんさん、昨日あれだけ鮮烈なデビューを飾ったワイを覚えてないんか？」

昨日？鮮烈なデビュー？

「わるい、まったく記憶にない」

俺の言葉を聞いてあからさまに肩を落とす、なぞの関西弁。

「はあー、まあええわ。ほんならもっかい自己紹介といこか。

ワイの名前は重松誠。しげまつまこと

このクラスの数少ない男子同士、なかよーしよっや、ジョージ。」

なるほど、昨日自己紹介させられた四人の男子のうちの一人か。たしかあのとき俺は自分のことに必死で、ほかのやつの話なんて聞いていられる心理状態じゃなかったからな。覚えてないのも無理はない。

「ああ、よろしく。」

それだけ言っつて俺が横を通り過ぎようとするのを慌てて静止する重松。

「ちよっ、ちよい待ちーな。そない急がんでもええやろ。

ワイと親睦深めようやないか」

「……別にいいけど。」

正直うっとうしかったが、この学校での男子との関係は死活問題だ。

できるかぎり大切にしていきたい。

「それにしてもあんさん、昨日はなかなかキメてくれたやないか。あれ、ねらってやったんか？」

重松は顔をにやけさせる。

最初は何のことかわからなかったが、すぐに昨日の自己紹介のことだと察する。

「そんなわけないだろ！」

「わはははっ！わるいわるい。

ところでジョージはなんでこの高校にきたんや？」

重松は軽いノリで言う。

どう言おうか迷った拳句、肝心なところははぐらかすことにした。

「……ある人との古い約束だ。そういうお前は？」

こんな地獄を自ら選ぶくらいだ。さぞかし重要な理由があるに違いない。

「ワイか？　ワイは……女の子や！」

「……なんだってっ！？」

「あ……意味がわからないんだが。」

「つまりや、男子と女子の比率が一对九のこの学校にワイが来た理由は一っ。

女の子とイチヤイチャしたいからや!」

……射茶射茶?
いちやいちや

「お前、死にたいのか?俺でよければ相談に……」

「ちゃうわ!ええか、よう聞け。計算上、この高校の男子は一人で九人の女の子と付き合えるんやで。」

「こんな天国、ほかにあるか?」

重松は必死になって訴えてくる。そのまま襲ってきそうな勢いだ。それとは裏腹に、俺は自分とこいつの間を決して埋めることのできない溝を感じていた。

「おーい席に着け。」

「お、真夜ちゃんの登場や。ほんならまたあとでな、ジヨージ。」

自分の席へ戻る重松の背中を見ながら俺はまた不安が一つ増えたことに

気落ちしていた。

学級委員 チョイス

「学級委員を決めないといけません。」

1年D組の2度目のホームルームは篠原先生のこの第一声で始まった。

「一クラス2名で、本当は女子だけや男子だけでもいいのですが、私は基本的に男女平等を

目指していききたいのでこのクラスは女子男子それぞれ一人ずつにします。」

それでは誰か、立候補はいませんか？」

先生が言い終わるとほぼ同時に教室の真ん中付近で一本、手が拳がった。

「はい。先生、わたしがやります。」

すぐに篠原先生は教卓の上に目を落とす。おそらく名簿表を見ているのだろう。

数秒後、

「ええっと、あなたは……鳴滝なるたきさんね。」

はい、それじゃあみんな彼女に拍手！」

教室中から控えめな拍手が起こる。

俺の席からは鳴滝さんは長い黒髪ということしかわからない。

だが自ら面倒な仕事を引き受けるくらいなのだから、まじめな人と俺は勝手に見当をつけた。

「次は男子、誰かいませんか？」

先生は教室を見渡しながら言う。

もちろん俺にはやろうという気は微塵もなく、ただ机と向き合ってボーっとしていると

ツンツンっと背中をつつかれた。

すぐに若月さんだと分かり、慌てて振り向いた。

今度はちゃんと顔を見ることができた。

銀白色のショートヘアに端正な顔立ち。

しかしそれよりも目を引いたのは美しい碧色の瞳だった。

なんというか……めっちゃくちゃ可愛かった。

「？ どうしたの？」

気づくと若月さんが下から俺の顔を覗き込んでいた。

すぐに身を引く。

「な、なんでもない。そっちこそどうしたの？」

すると彼女はまた顔を寄せてきて、思わずドキッとしてしまった。

「あ、そうそう。ジョージ君、学級委員やらないの？」

「……は？」

予想外の言葉に俺は素っ頓狂な声を上げてしまった。

「いや、やらないやらない。こっぴつこのガラじゃないし。」

「えー！絶対ジョージ君がやったら面白いと思ったんだけど・・・」

残念そうに肩を落とす若月さん。

「なんで俺がやると面白くなるんだ？」

「だってだって自己紹介が最高に面白かったし。」

「あれは・・・」

「事故だ」と言いそうになったが一つ思いついた。

「ねえ若月さん、学級委員って・・・好印象かな？」

俺の言葉に怪訝そうな顔をする若月さん。

「うーんうーん・・・悪いイメージじゃないのは確かだけど・・・」

「分かった。ありがとう。」

そして・・・俺は勢いよく手を挙げた。

後ろから「え・・・！」と若月さんの驚いた声が聞こえる。

当然だろう。俺も最初はやるつもりは毛頭なかった。けれど自己紹介のことを思い出し、今の俺のイメージがあまり良くないことを考えると

この学級委員というのは汚名返上の絶好のチャンス。

・・・そう思っていたのだが。

「あら、もう一人出たの。どうしましょうか？」

もう一人？

周りを見ると、俺とは対角線上の席でまっすぐ手が拳がっていた。

学級委員 チェイス

・・・あれは・・・誰だっけ？

自己紹介のとき意識が飛んでいた俺にはまったくわからなかった。でも俺は別に学級委員がしたくて立候補したわけではなかったので諦めよう、
と思つて先生にそう言おうとしたのだが、その前に相手がさきに口を開いた。

「篠原先生、あいつより自分のほうがこの仕事にふさわしいと思います。」

一瞬、自分の耳を疑つた。

いきなり何言い出すんだ、あいつ・・・。

「ど、どうして、犬丸君？」

さすがの篠原先生も今の発言は想定外だったらしく少し狼狽した声になつている。

犬丸はクラスの全員が固唾を吞んで見守る中、堂々とした口調で言つた。

「なぜなら学級委員とは優秀な人がなるのが常識で、僕のほうがあいつよりも優秀だと

自負しているからです。」

俺は絶句した。どうやら先生も同じらしく、口を開いたまま止まっ

ている。

いくらなんでも知らないやつ、しかも男にそんなことを言われて、黙って引き下がれるわけがなかった。

「……それじゃ、柳葉君は？ 何か言うことはある？」

とりあえず犬丸よりも聞きやすいと思ったのか、先生は俺のほうに振ってきた。

「いえ、特に。ただあいつより俺のほうが強い自信はあります。」

怒った感じで言って、犬丸のほうを睨む。

そのときちよとど一本の線が引かれたように、こっちを見てきたそいつと目が合った。

時が止まったように感じる。そして犬丸は振り返って先生のほうに向き直る。

「先生、僕はこいつにダンスを申し込みます。それでどっちがふさわしいか決めてください。」

……は？

「いいでしょう。今日は身体調査をする予定でしたがこのクラスはそれは後のほうに回して

もらいましょう。それではすぐに行うので全員、外に出なさい。」

「ちょっと待ってください！」

俺は慌てて引き止める。なぜか話が違和感なく進んでいるが俺はまったくついていけない。

最大の問題は、

「俺、踊れないんですけど……。」

そのあと、ダンスとはこの学校で決闘を意味するものだと言われ、先生から教えられるまでクラスの中に嘲笑が響き渡っていた。

まぎらわしいわっ！

嵐の前に・・・ インターバル

「いやー、あんさんほんまおもろいな、ジョージ。」

さすがのワイもあそこでウケを狙いにはいけんわ。」

廊下に出た途端、重松がさつきと同様、馴れ馴れしく近づいてきた。ちなみに、現在俺たち1年D組はシアターと呼ばれる決闘^{ダンス}を行うための

場所に移動中。

「なんで俺以外のやつはダンスとか知ってるんだ？」

「はあ？ あんさんこの学校受ける前に調べんかったんか？」

普通いろいろ調べてから学校決めるやる。」

「いや、深く考えなかったから。」

そもそもきちんと調べていたらこんな学校を選ばなかっただろうし。

「だいたいダンスって何だよ！ 決闘と全然関係ないだろ！」

「そないなことワイに言われてもなあー。」

重松は肩をすくめて困ったような表情になって言った。

さっきの失態を思い出して、少々八つ当たり気味になってしまった。

「あ、それぞれ私知ってるよー！」

重松に謝ろうとしたとき、後ろから元気すぎる声が聞こえた。

振り向くと、案の定若月さんだった。左右にはポニーテールと三つ編みの女子がいる。

「な、なにが？」

「だからだから、ダンスとかシアターとかの理由！」

こちらとの温度差をも無視してハイテンションな若月さん。……やっぱり、いつもあのテンションだったのか。

「へえー、それって……」

「おいつ！」

いきなり隣で重松が大声で叫んで俺の言葉をさえぎった。しかも大量のつばが飛んでくるおまけつき。

「うわっ、きたねっ！　なんだよ？」

ワナワナと肩を震わせていて、若月さんも驚いてる。

「だ、だれや、その子？」

「私は若月沙耶。よろしくね。たしか……しげはる君……だっけ？」

「ワイと付き合ってくださいー！！」

突然頭を下げて告白する告白する重松。一瞬、時間が止まったかと思われた。

・・・馬鹿か。

若月さんは顔を少し紅潮させて、もじもじと手をいじくっている。だが決意が固まって、彼女が口を開こうとした瞬間、

「死ねー！ー！ー！」

ドゴツ！

と重松の顔面にポニーテールの女の美しいフォームのとび膝蹴りが入った。

そのまま5、6メートル先まで吹っ飛ばされる。

・・・まじで死んだんじゃないか・・・。

「ふん。沙耶に手を出そうなんて、死に急いだな。汚らしい男め
！」

そいつはピクピクと動いている重松の屍に向かって吐き捨てるように言った。

出会い ポニー

「や、やりすぎだよ、クーちゃん！」

「いいんだよ。どうせ男だし」

若月さんの言葉にも反省する素振りには微塵もないポニーテール。近くで見ると背が高く、美人であるのがはつきりとわかる。だが、

……こいつも男を差別してるやつの一人か……。

「なに見てんだよ。おまえもやられ……」

「なにしてくれんねん！」

俺に怒りの矛先が向こうとしていたところに紙一重で、重松が叫び声とともに

復活した。そのまま自分を蹴った張本人の前に立ちはだかる。

「邪魔だ、どけ。いや、死ね。」

ポニーテールはまるで汚いものを見るかのような目で重松を見て言った。

「な、なかなか言うやんけ。だがワイは女の子には手を上げんと決めとるんや。」

「よかつたな、貧乳ちゃん」

ニヤニヤ顔で重松は相手の胸の辺りに目を向けながら言った。
ポニーテールは聞くと突如顔を紅潮させて胸を押さえる。頬がピク
ピク動いているところを見ると
どうやら相当気にしてるみたいだ。
たしかに標準よりは・・・小さいな・・・。

「お前・・・クロス！」

「お、やるんか。受けてたつでー」

「もうもう、喧嘩はダメだよ！」

お互いに相手を睨み火花を散らす。まさに一触即発のところに
若月さんが両手を広げて割り込んだ。

「沙耶、危ないから下がってろ」

「そやそや。怪我するで」

まったく若月さんの言葉に耳を貸そうとしない二人。
その様子を見てガクツと肩を落とす若月さんに少し同情した俺は
何か言おうとしたがすぐにやめた。

もちろん俺に勇気がなかったわけではなく、とてつもないオーラを
感じたからだ。
若月さんから。

「二人とも・・・わたし、怒るよ」

静かな口調と真剣なまなざし。しかも屋内なのになぜか風が若月さ

んに向かって吹いている。

別に強風というわけではないがそれがまた威圧感を増加させている。いがみ合っていた二人も慌てて口をつぐんで、お互いに目をそらした。

俺はこのとき、最強なのは若月さんだと確信した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0573q/>

魔女たちの楽園

2011年10月8日13時54分発行